

生活文化と「お花屋さん」

松山 誠

(園藝探偵)

お正月に飾られる「マツ（門松、若松などの切り枝）」の収穫作業は、毎年10月の第3週頃から始まります。ずいぶん早いと驚かれるかもしれませんがね。例年「12月第2日曜日」に開かれる松市に合わせて産地では、暑さが落ち着く頃を待って収穫に取り掛かり、水に浸けて保存していきます（写真①、近年は冷蔵施設も利用）。松市は、1軒の出荷量が何万本にもなるマツがこの日一日で取り引きされる、まさに真剣勝負の日。昔と違って景気づけにお酒が振る舞われるようなことはありませんが、やはりこの日の花市場は通常と違った緊張感や高揚感に包まれ、いよいよ年の瀬だと感じられるようになります。

写真②は、茨城県神栖市にあるマツ（クロマツ）を栽培する畑の様子です。サッカーで有名な鹿嶋市とともに関東最大かつ日本屈指のマツの生産地です。太平洋に面し清冽な風渡る畑には、見渡す限りマツだけが「密植^{みつしよく}」されていて一種独特の雰囲気があります。マツは種まきから3年目、4年目に地際から刈り取って収穫・選別し出荷されます。お墓参りの束に入れる細くて短いものから高さ2メートルの大きな装飾用まで、すべてこの一つの畑から収穫されるのです。植物は苗を密に植えることによって互いに競争して生長し、また支えあって長く真つすぐに伸びます。株の下の方の枝や葉は大きくな

松山 誠（まつやま まこと）

花のクロノジスト、園芸関連の執筆・編集。学生時代、お茶の水女子大学児童文化研究会に所属し自分の大学以上にお茶大に通う日々を過ごした。
『園藝探偵』1～3（誠文堂新光社）など。



▲写真① 仕分け・調整され松市まで保管されるマツ。



▲写真② 見渡す限り密植されたマツの圃場。



▲写真③ 収穫時、地際から刈り取られる。

れず、自然に枯れ、門松や若松に適した姿になります。写真③は、収穫途中の畑の姿ですが、枝が真つすぐに伸びている様子がわかります。マツには菌根菌といって根の周辺に共生する菌類が豊富なことで知られていて、地表には白い菌糸が無数に見えます。マツは広範囲に広がる菌根菌の働きによつて痩せた土地でもよく育ちます。

少し難しい話になってしまいましたが、マツは本来このように真つすぐに育つ植物ではなく、人間がこのような栽培方法を取ることで利用しやすい姿に変わったということなのです。日本でも古くから栽培されてきた「麻」や「からむし（苧麻）」も、同じように「密植」して育てます。脇枝が出るのを抑え、真つすぐに生長させることで、品質の良い長い繊維が採れるように

なるのです。誰が見つけた技術なのかはわかりません。ただ、とても古い時代から綿々と行われてきた技術なのだろうと想像できます。

実は、温室などでの切り花生産の現場でも、植物を密に植えることで生長を促し、茎を真つすぐに伸ばす性質を利用しています。近年の研究によると、植物は体内にあるさまざまなセンサーで環境を測っていることがわかってきました。たとえば、植物は日没(end of day)から数時間における温度や光刺激に強く反応するのですが(EOD反応)、この時間帯での温度管理や光の照射を工夫することでより効率的な生育調節を行うといった取組みが実際に行われています。根付いた場所から動かない植物は数多くの感覚器官を備え、自分の姿を変えて生きるすごい力を秘めているのです。太陽がゆつくりと西に沈もうとする頃、植物たちは、あたりを見回して、背伸びをしたり早く花を咲かせようと思ったりしていると想像するとちょっと楽しい気持ちになつてきませんか。

「花屋」を学び、「園芸」を利用する

お花屋さんというところ、切り花や鉢植えを並べ、花束を売るようなイメージですが、仏壇の花や神棚に供える榊なども用意し、お盆やお彼岸、「母の日」といったいわゆる「もの日」を含め、生活文化を成り立たせるために欠かせない商品を日々取り扱う、いわば社会的機能を持った街場の施設なのだと思います。たとえば年末には、鏡餅に敷く裏白、ゆずり葉などのほか輪飾りや「しめ飾り」も扱います。しめ飾りにはさまざまな型があり、全国各地に伝統的で美しい飾りが見られます。かつて東京を中心とした地域では、現在の足立・葛飾・江戸川区、あるいは荒川・墨田・江東区といった近郊の農村で農閑期の副業として作られてきたもので、大切な生業の一つでした。花屋ではクリスマスリースを手作りする教室が流行っていますが、ここ数年は、しめ飾りづくりも人気になってきます。現在は材料となる「稲わら」の入手が難

しくなっていて、イネの栽培から始めている人たちもいます。このような四季折々の季節の行事は、暮らしにリズムを刻む楽しいイベントであると同時に、いろいろなことを考えるきっかけになると思います。子どもたちにもできることがたくさんありますから、ぜひ地元の花屋や農家を味方にしてお飾りづくりをやってみてはいかがでしょうか。

僕はいま、「読む園芸Ⅱ園藝探偵」ということで幕末から昭和にかけての日本の園芸文化の歴史を勉強しています。「育てる園芸」、「飾る園芸」だけでなく、さまざまな園芸書や文献を集めてそのテキストを「読む園芸」は誰でもいつでも始められますし、とても奥深くおもしろい活動です。園芸というと現在はかなり狭い意味になっていますが、もともとは果樹、野菜、工芸や薬用また観賞用の植物、造園や景観の改修、軍需（防空・食糧生産）など幅広い分野を含んでおり、現代人の生活に関わるさまざまな問題解決のヒントが隠れているように思えてなりま

せん。誰もが知っている花や緑も、名も知らぬ人たちがここまで運び育ててきた物語を持っています。花でも人でもいいし技術や資材など、さまざまな切り口から園芸を見ていくことで、自分とのつながりを見出し、植物の不思議さや人の営みのおもしろさが倍增するような気がします。

教育分野ではベスタロッチやフレールにゆかりの深い花壇づくり、学校園や教材園、中学校「作業科」など明治・大正・昭和と継続して研究・実践が続けられてきた道のりを振り返ってみることも無駄ではないと思います。一つ、課題は「花屋の利用の仕方」です。2004年、日本での「花育」の起点もここにありました。花屋の世界も生産から流通、販売に至るまで高齢化や人手不足など、いろいろな問題を抱えています。長い歴史を通じて花や緑が不要になったことは一度もありませんでしたし、これからもないと信じ、学びを続けていこうと思っています。